

日本という国「日清日露戦争②」

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

日清戦争(明治27~28年)は、西洋列強国、特に具体的な驚異のロシアからの防衛ラインである朝鮮半島を清から独立させ、近代化を進めて防御力を高める目的で行われました。

しかしロシア・フランス・ドイツの三国干渉※1に屈して日清戦争で得た遼東半島を失ったことにより、日本がロシアの圧力に弱いと認識した朝鮮では清に代わってロシアに接近する勢力が力を持つようになり、国内の混迷はさらに深くなっていきました※2。

※1ロシアは遼東半島の真の不凍港の旅順港を狙いました。(ウラジオストクは冬の厳寒時凍結します) フランスはシベリア鉄道の鉄道債を引き受けており金融で深いつながりがありました。

ドイツは、ロシアの南下政策を極東に集中させることで自国への驚異を除くことができました。

※2 経済が破綻し、両班身分の売買、ロシアへ山林伐採権・鉄道敷設権・鉱山採掘権を売っていました。

清は、日清戦争後翌年ロシアに接近し、露清密約で兵員を大量に送ることを可能とするシベリア鉄道に接続する満州經由ウラジオストク・旅順に至る鉄道敷設権を与え、その後なんと、遼東半島を与えてしまいロシアの旅順軍港など軍事施設建設が始まります。

明治33年、清で大規模な騒乱の義和団事件がおり、ロシアはそれに乗じて満州を中心に万里の長城以北の清の領土に軍隊を送り支配下に治め、事件収束後も列強各国の抗議を無視して軍の撤退をせず、植民地としての既成事実化を図ります。

ロシアの南下政策が進み、清での自国の権益が阻害される恐れが発生したイギリスは、ボア戦争直後で余裕がないため、日英同盟を結び、日本がロシアを牽制することを期待することになります。(義和団事件で日本軍の働きが列強国に感銘を与えたことも背景にあります)

ロシアでは、日本との戦争に否定的なクロパトキン陸相等が失脚し、朝鮮を植民地化しようとしていたエブゲーニイ・アレクセーエフが極東総督になり実権を握っていました。

極東の利権を増やし、支配を周到に進めるロシアに対して、朝鮮半島だけは自国防衛の生命線としてロシアの影響を除きたい日本は、朝鮮半島から手を引くように交渉しますが、圧倒的な軍事力をもつロシアが戦争を恐れる理由はなく、妥協をすることはありませんでした。

明治37年、大量の武器と兵隊の輸送が可能となるシベリア鉄道から旅順までの鉄道が、単線でありながらも完成するという、日本にとっては悪夢のようなことがおこる間際となり、直前まで戦争は避けるべきと伊藤博文首相や多くの閣僚・元老は思っていました。ロシアへの宣戦布告を余儀なくされます。

当時、下表の如くロシアと日本の国力の差は圧倒的で、世界一の陸軍兵力と世界3位の海軍力を持ち、日本が勝つと思っていた人は世界に誰一人いませんでした。



日清戦争後 日露戦争前

	ロシア	日本
人口	1億2000万人	4600万人
国家の歳入	20億8千万円	2億9千万円
常備兵力	200万人	20万人
軍艦総排水量	80万トン	22万トン
戦艦	15隻	6隻
平均身長	173cm	160cm